

ものなさけぶかい話には、心もホキホキする。琴や書物で楽しく暮せば、シンバイのシの字も無い。そのうち百姓どもは、「ヤア先生、モウ春になりましたぞ。」なんて、そろそろ田畑の耕作も始まると、自分も運動がてら鋤鋤手にして出かける。時としては又、車を命じて乗つてもみたり、一つの舟に棹さしてもみたり、谷の奥ふかく岩がけの景色を探つてもみたり、又、山坂けはしいデコボコ道をおもひでもみたりすると、樹木はいそそ春さき向つて若緑の著物をつけ、泉はチヨロチヨロ氷も解けて流れ出す。森羅万象、時を得がほのさまを見て目をよろこばすにつけても、自分のいのちは一歩一歩に死に近づくことを感ぜらるる。

已矣乎、寓形宇内復幾時。曷不委心任去留。胡爲遑遑欲何之。富貴非吾願。帝鄉不可期。懷良辰以孤往。或植杖而耘耔。登東臯以舒嘯。臨清流而賦詩。聊乘化以歸盡。樂夫天命復奚疑。

已みなんかな、形を宇内に寓することまた幾時ぞ。曷んぞ心に委せて去留に任せざる。胡爲れぞ遑遑として何にか之かんと欲する。富貴は吾願に非ず。帝郷は期すべからず。良辰を懷うて以て孤往し、或は杖を植てて耘耔す。東臯に登つて以て舒ろに嘯き、清流に臨んで詩を賦し、聊か化に乗じて以て盡くるに歸す。

夫の天命を樂しんでまた奚んぞ疑はん。

【語釋】○形は形骸、即ち身體。○宇内は天地間。○去留は生命の去留。○遑遑はいそがしさうなさま。○帝郷は天仙の都。○良辰は良き時、吉日。○耘耔の耘は草ぎる、耔はつちかひ肥料を施すこと。○臯は澤邊の小高き處と譯してよからう。○化に乗ずとは、天地の化育の爲すがまにまかせること。○歸の字にはマカセル、ユダネルといふ訓がある。

【通解】さてさて世間の事は、斷じて思ひきつてしまはうよ。わづか五尺のこの一身を天地の間にたもつて居ることも、もう此のさきどれ程かわかりはしない。早かれおそかれ、どうせ死ぬ身を、なぜ心まかせにして天命まかせにしないことか。なぜスウスウハアといそがしさうにして、どこへいつて何をしようと思ふのか。浮雲も同様の富貴なんかは固より自分の願ひでなく、さればとて、天仙の都へ行くなんかは又思ひもよらぬことである。ママヨ、花のあしたや月のゆふべと、吉日良夜を慕うて獨りでフラリと出あるいたり、ついたる杖を地に打ちたてて草取りつちかひのわざもしてみたり、澤べの小高い處にのほつて、しづかに天地の浩氣にうそぶくなり、清き流れにさし臨んで詩でも作つたりして、ともかく天地の化育まかせにわが生命の盡るのを待つことよ。悠悠たるかの天命といふことを樂しむ以外、わが胸中には何一念心の疑ひがあらうかや。

【總評】文は固より天下の逸品。高節清操、人格のけだかく奥ゆかしい所が、文辭の上にも文辭の外

にも勻なひこほれて見える。晝夜塵事に離あれたる人は、日に一二回くわいづつもこんな文を讀んで見るがよい。必ず一服の清涼劑せいりやうざいにはなるであらう。さはいへ今の世に、高く澄あまして隠士いんしを氣取つて貫つては大いに困る。活動くわつどうに活動くわつどうをしなければならぬ、今の世人せいじんが、皆淵明みなんめいになつたらそれこそ大變、國家は忽ち滅亡めつぱうしてしまふ。只その高潔かうけつな志こころざしだけを學んでよい。その跡あとを學んではならぬ。知らずや大隱たいいんは市に隠れるといふことを。熱鬧ねつたうの巷ちやうにあつて國家社會こくかしゃかいに對する業務ぎふくは二三人前ふたも盡つして、その頭かぶのあついで中にこの涼しい境涯きやうがいを得させたいのである。「雨中うらなに呆日かうじつを看、火裏くわに清泉せいせんを酌くわむ。」とは古人の句である。

【餘説】蘇東坡そとうはの評、「歐陽公嘗おうやうこうかうて言へり、「兩晉りやうしんに文なし獨り此の歸去來の辭一篇あり。」と。その辭義ぎの夷曠いこう蕭散せうさんなる、楚聲そせいなりと雖も而も尤い怨局蹙うらんきよくさくの病やまひなし。」李性學りせいがくの評、「陶淵明たうえんめいの歸去來、野鶴風やかくふうに任せ寒鷗かんきう海かいに立つの狀あり。之を讀めば人をして清灑せいさいならしむ。」浦二田ほにたんの評、「其性の近き所に非ざれば之を去り、其性の近き所には則すなはち之に安んず。天を樂したのみ命を知るの意思いしを識得しきとくせり。」胡秋宇こしゅうの評、「此篇このへん必ずしも實用じつように切きなることあるに非ず。但ただその寄興ききうの高遠かうえんなる、韻度うんどの蕭散せうさんなる、學者遊息がくしやうそくの暇いとまに之を誦よし之を詠えいせば、以て塵襟じんきんを滌からひて逸思いつしを生しやうずべし。」

【後記】謝疊山しゃたていざんが文章軌範ぶんしやうかいはん、出仕しゆつしを求むるに始まつて、退隱たいいんに終る。學成がくなつては出でて世の爲にし、

功成こうせいり名遂なとけては身退しんたいくの意を寓ぐしたものである。とは説者の説である。果してそこまでの寓意ぐいがあつたかどうかは疑問ぎもんに屬するが、ともかく、種種しゆしゆの趣味しゆみある名文めいぶんを種種しゆしゆに排列はいれいして、一文一文いぶんいぶん、絶世ぜつせいの大家たいかを地下ちかより起おして親しくその面貌めんぼうに接して親しくその教をくを請ふの思おもあらしめ、少すくからず吾人ごじんに作文力ぶんりきを興おこへてくれたことは、十分に感謝かんしゃの意を表すべきである。

16. 6. 24  
X

文章軌範 卷七 大尾

岡山製本

大正十五年十一月二十六日印刷  
大正十五年十一月三十日發行

詳解 漢文叢書 第五卷 文章軌範  
全譯 (非賣品)

著者 友田 宜剛

發行者 加島 虎吉  
東京市日本橋區本石町三丁目十四番地

印刷者 井上 源之丞  
東京市本所區番場町四番地

著作  
所有

發行所

東京市日本橋區本石町三丁目十四番地

至誠堂

電話大東一七四六番  
振替東京一七四六番

文學博士 幸田露伴監修

詳解  
全譯

漢文叢書

(全十二卷)

第一卷 日本

外史

上卷

大町桂月 補註  
公田連太郎 評註

第二卷 日本

外史

下卷

大町桂月 補註  
公田連太郎 評註

第三卷 日本

政記

大町桂月 補註  
公田連太郎 評註

第四卷 十八

史略

公田連太郎 譯解

第五卷 文章

軌範

友田宜剛 譯解

第六卷 續文章

軌範

友田宜剛 譯解

第七卷 唐

詩選

川上天山 譯解

第八卷 大論

學·中庸

高成田忠風 譯解  
大町桂月 評註

第九卷 孟子

高成田忠風 譯解

第十卷 老莊

子子

西田長左衛門 譯解

第十一卷 莊子

子子

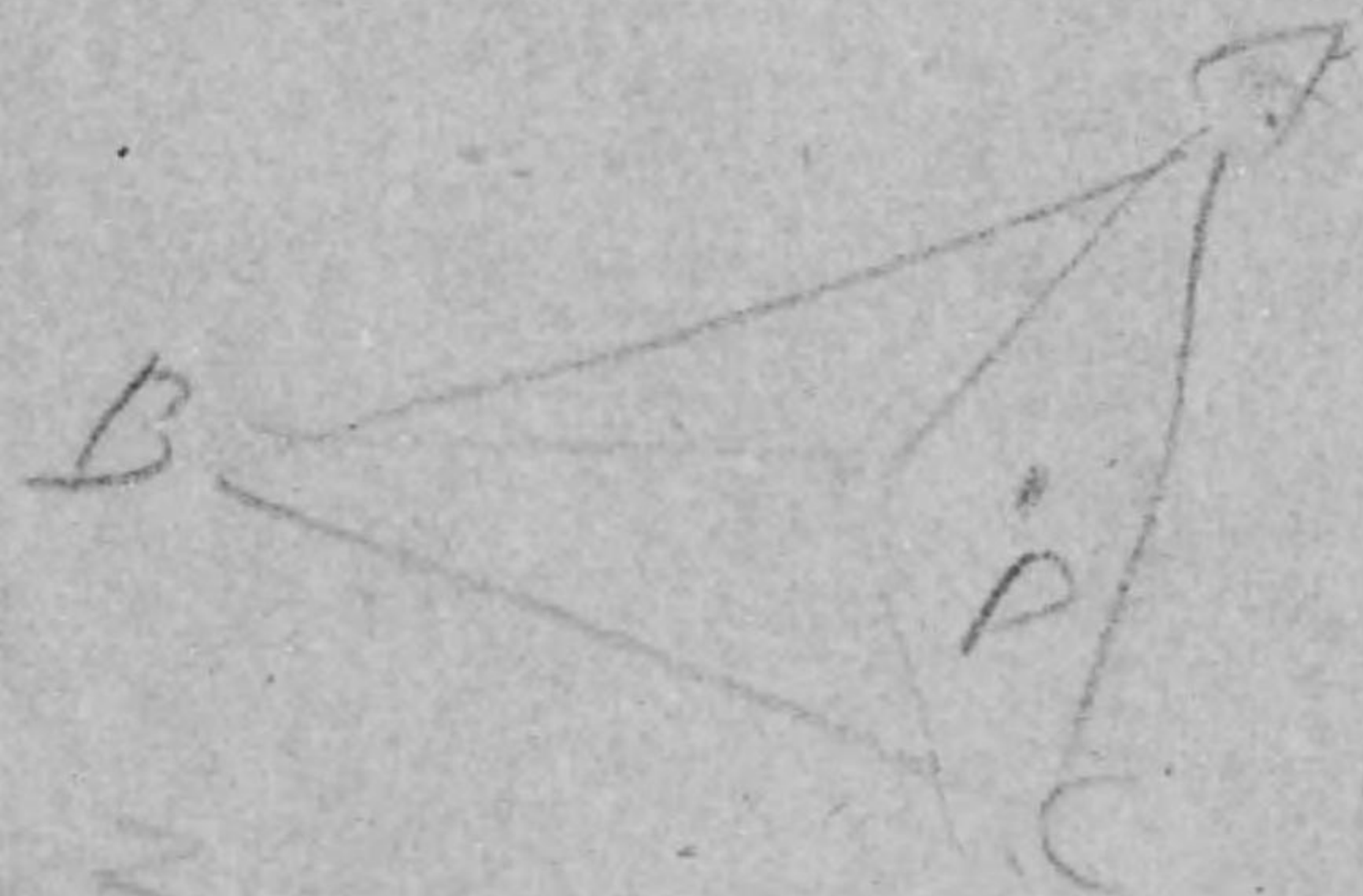
西田長左衛門 譯解

第十二卷 菜言

志根 四錄

友田宜剛 譯解

545  
48



$AP^2 + BC^2 = BP^2 + AC^2 = CP^2 + AB^2$

終

